

昭和二十四年七月二十三日、第三種郵便物認可
昭和五十六年三月十五日発行（毎月一回・十五日発行）

（通第三八一号）

次

他力信仰の妙趣……………近角常観……………(1)

こころ（仰信随筆）……………福島政雄……………(5)

一道会の記……………榊原徳草……………(10)

凡骨日誌抄（2）……………西元宗助……………(14)

目

御一代記聞書抄（続・十七）……………井上善右エ門……………(17)

念仏詩抄……………木村無相……………(20)

法味断片……………花田正夫……………(22)

慈光

第三十三卷 第三号

他力信仰の妙趣

近 角 常 観

信仰のこともあまりにむつかしく考えられるの極、平凡の人の企て及ぶべからざる様に誤解される傾がある。信仰は決してえらいことではない、人間として必ずしうねばならぬものであるが、また何人も容易に得らるるものである。信仰と云えば偉人、傑士の事業であるかのように思うのは大きな誤りである。一文不通の者が如来廻向の一つによつて、たちまちに信心獲得が出来るのである。しかし不思議なことに如何なる愚痴なる人でも、信樂開発の一念にただちに広大勝解の人となるのである、俗に云えば大いに分った人となるのである、要領を得る人となるのである、これは事実である。不思議という外に申し様がない。

そこで何人もその信心開発の一念に達したいと求めるのである。しかしそれが如来廻向であるから、此方から求めて得るのではない、こちらから求めて得るのであれば自力廻向である。それではどうしたらよいかと云えば外ではな

人間は善をなさねばならぬ、悪をしてはならぬということとは誰も能く承知していることであるが、その通りに出来さえすれば人生問題の解決は容易である。人は生を欲し死を嫌う、もしその通りに出来れば人生の煩悶はない。しかるにその善が出来ない、また悪が止められない。その生が得られず、また死から免がれられない。ここに種々の形をもつて百般の人生問題が起り来るのである。

しかれば善が出来ずともよい、悪をしてもよい、生きても死んでもよいではないかと云われても、そうは承知出来ぬ、出来ぬ善をしたい、止められぬが悪は止めたい、生は得たい、死は避けたい、而して一として望む通りに出来ない、この如く我等は正しき道と煩惱の間にはさまつて何んとも致し方がない。ここにおいて、その致し方のない我等を憐愍したまうがそもそも大悲大願の淵源であり、出発点である。

何人も仏とは如何という疑問を提出するのであるが、我等と無関係に仏を信ずることは出来ぬ。ことに阿弥陀如来はもし超世の願がなかったならば顕われて下さらぬのである。さらにきりつめて云えば、我等が果して理想的に実行することが出来るのであれば、阿弥陀如来は顕現されなかつたのである。阿弥陀如来という全体が、このように煩惱

い、聞其名号じや、観仏本願力じや、要するに如来の思召をきくに限る、決してむつかしい事はない。

如来の思召というは外のことではない、我等罪業深重の衆生がいたずらに煩悶懊惱して善を為さねばならぬと知れども、為すことが出来ず、悪を為してはならぬと承知しながら悪を為し、自ら苦しみながら煩惱を起し、たのむべからざる夢の如き人生を頼みとし、生死海中に流転しつつある有様をみそなわして、深き大悲の御心より憐愍矜哀の思いやるせなく、よく我等の根機性分を知ろしめして、如何にも可愛相に思召され、普通の法によりては助かることの出来ない点を御存知あつて、それを助けんとある思召が超世の本願ということである。この点に深く注意して聞かねばならぬ。いずれの法にても、いずれの行にても助からぬものをたすけんという点が有難いのである。

をもつて苦しみつゝある我等を見捨てたまうことが出来ぬ大悲心が本となつて、超世の本願、即ち普通で助からぬものをたすけんとの選択本願を建てたまつたのである。そして成就されたのが即ち念仏である。このようにして正覺を成じたまうた御仏が阿弥陀仏である。故に本願は阿弥陀如来の顕われたまう根元にして、また今現在に我等を招喚したまう如来の思召である。即ち我等が罪業深重なために五劫思惟の御苦勞を為して下されたのである。こうして十劫已来、わが親心が分らぬか／＼と待ちかねて呼びたまう勅命が本願である。

このやるせない誓願を聞けば何人も信せずには居られぬ、不思議と叫はずには居られぬ。かくまでも私一人のために御苦勞下されたかと頂かねばならぬ。善をしたい、そして出来ぬ、為せと命ぜられても致方なく、出来ずともいいと云われてもよいとは横着になれぬ。しかるに仏かねてしろしめして、私の出来ない点を憐みたまいて、その者を助けんとて永劫の御苦勞を為して下されて、今現に阿弥陀仏となりて我を待ちかねたまうを聞けば、どうしてかその大悲大慈をただかずに居られよう。聞其名号信心歡喜のその一念に親心をいただくのである。

若くは不生者のちかいゆえ、信樂まことにときいたり

一念慶喜するひとは、往生かならずさだまりぬ

というのは実にこの点である。法然聖人から親鸞聖人への附属の文に

彼仏今現在に成仏したまへり。当に知るべし、本誓重願虚しからず、衆生称念すれば必ず往生を得。とある。これがこの親心を聞いて信心開発する一念の心持である。

そこでこの一念をもつて、直ちに至心に廻向したまへりと仰せられた。実にこの一念は如来が至心に我等に廻向したまいたのである。これはじめに言うた通り如来廻向の一つによって信心獲得が出来るといつた点である。信巻及び略文類に、薄地の凡夫、底下の群生、淨信獲難く、極果証し難きは畢竟往相の廻向に由らざるが故じやとあるは実にこの点である。決して無上妙果が成じ難きにはあらざるもこの信樂を獲るのがむづかしいのである。何んとなれば、この如来廻向に由らずして信仰を得んとするからである。しかるに信樂を獲るのは外ではない、如来の加威力に由るのである。如来より直々に威神を加えたまうのである。曇鸞大師が天親菩薩の一心を釈して、如来威神を加えたまうにあらずんばは何を以てか達せん。この故に仰いで告ぐと申されたもこれである。信巻に、往相の一心を發起すると申されたもこれである、実にこれ仏智他力のお授けであ

る。

またもとへかえつて繰り返すことになるが、それ故、この仏智他力を聞けばこの信が授けられるのである。その他力とは如来の本願力である、選択本願である、超世の本願である。行巻は十七願である、南無阿彌陀仏であるが、その中にはすべて如来の本願がこもりてある、如来の親心の総体である。それを釈尊がしらすして下さるのである。無量寿仏の威神功德不可思議なことを讃歎して知らして下さるのである。その弥陀の本願のまま、釈尊の仰せのままを知らして下さるのが法然上人の仰せである、南無阿彌陀仏である、十方群生海この行信に帰命したてまつれば撰取して捨てたまわず、とあるが即ち南無阿彌陀仏のいわれである、如来の本願のままである、本願招喚の勅命である、発願廻向である。この親心を聞き、この不可思議の仏智を信じ、この廻向をいただいたのが即ち信心である、信樂開發である、信心決定である。

我等は罪業深重の石の塊である、如来はそれを見捨てたまわぬ大悲大願の念力である。我等はいよいよこの念力の達せざる限り、この御心をいただかぬかぎり如来も御満足をなさらぬのである。しかるに遂に大悲の強力やるせな

くして遂に我等に達して下された一念、我等はただ如来の

御心のいかにもやる瀬なく極りなきに感泣するのみである、我等の罪業深重を懺悔するのみである。

かく親心をいただく一念、親様は実にこの上もなき大満足して下さるのである。五劫の思惟、永劫の修行、十劫已来のお待ちかね、唯この選択の願心をとどけたためにてありき。我汝を待つこと久し、汝遂に我心を得たるか、わが思いを受けたるか。御文に所謂、阿彌陀如来は深く喜びましまして其御身より八万四千の大光明を放ちて、その慈懷に撰め入れて下さるのである。これ実に撰取不捨である。ここにおいて極悪深重の衆生、大慶喜心を得て、諸々の聖尊の重愛を獲るのである。善導大師が、希有人、最勝人、妙好人、好人、上々人、眞の仏弟子と、仰せらるる身となつたのである。

噫、如来の本願は十方衆生を如来の大家庭に引入れんとての大計画である。撰取不捨の一念、実にその家庭の人となつたのである。大小の聖人、軽重の悪人、皆同じくひとしく選択の大宝海に帰して、四海の内皆兄弟、同一念仏の一家庭の人となるのである。我等信仰の生活は実にこの眞仏弟子として、尽十方無碍光の照護の下に、各々その職に従事しつつ、如来大悲の母、本師慈尊の父、諸仏菩薩眷属

護念の下に感謝報恩の生活をいとなむことである。

かくて臨終一念の夕、大般涅槃を超証するときは、無量光明土の淨国において無為常樂の眞実証を實現して、**お**生死の藺、煩惱の林に遊戲して、生々世々の父母兄弟を自由に救い遂げるのである。他力信仰の妙趣は実に不可思議の極みである。

~~~~~

~~~~~

~~~~~

#### 「光輪」より

足利 淨 円

○ 宗教に旧なるものと新なるものがあって、古いものはこの時代には役立たなくなつたので新興宗教でなければ時代に相応せぬと云う人がある。これはおかしいことで、絶対なものには新旧はなく、いつでも古くて新しいものこそ絶対のものではないかと思われる。

○ ほんとうの宗教というものは大地の底から流れ出ている地下水のようである。地上の水上には盛衰があるが、地下より湧き出る水は昔も今も変わりなくながれて居る。全人類のかわきをうるおしているもののようである。それでこそ宗教というべきであらう。



永劫の帰依所

偉大なるものを憧憬する時代は、真実のものを忘れ易い時代である。真実なるものは、偉大なりという姿を持たない。真実なるものは隠れたるものである。隠れて、偉大なりという意識をさえ持たないものである。

世間に名を知らるる生活は、人間として下なる生活である。併し名を知られざるをほこる生活も、また知られたるものである。随順の生活者は、名の知らるると知られざるを問題としない。いたるところに、随順の心をしなわれない。而して随順するが故に心は常に静かである。

さからう者はさからうことそのことにさえ、服従という名義をつけることがある。我は絶対の服従をなすが故に、我と違ふものを懲罰するという。しかし懲罰は、何人が真実にこれを行ひ得べきものであるか。懲罰すると称しながら、さからう心を満足せしめて居るものが、世には多いではなからうか。

親に従うことは絶対の従順である。絶対の従順は、親の

自覚とは何であるか、さからうものは、自覚とは自己の価値の意識であると思う。或は、自己は無価値であると感じずる謙虚の自覚を云々する。しかし、価値と無価値とに彷徨する者は、要するに囚われの人である。しかも我等は常にとらわれるものである。価値や無価値に囚われて、真個に自己を放下(ほうげ)する所以を知らない。従つて真に落ちつくことがない。

随順の生活は、真に落ちつく生活である、親の心に落ちつく生活である。久遠の親のいのちに落ちつく生活である。我等は、そこに我等の生命を放下する。計らい多き心を久遠の親のはからいの中に投げ入れてしまふ。そこには動ける心のままに、落ちつき行く心境が出現する。

久遠の親というのは空虚な概念ではない。久遠の親は、我等がいのちにおいて直に感ずる生きたるいのちである。我等の生みの親は、我等を久遠の親へと呼びさしますこの世の縁である。生みの親を相對の存在として観じているとき我等には、久遠の親が切実なはぐくみのいのちであることはわからぬ。生みの親と死別したる後において、はじめて生みの親が久遠の親のいのちの縁なることに目がさめる。そのとき、久遠の親のいのちが直に我等のいのちに生きてあることを、今更のように気づくのである。

歴史はおきおき出であるとも考えられるが、実は近

福島政雄

心が子においてははぐくみ出すものである。故に子はさからいながら実は従つて居る。真実の親の前には、さからう子はない。さからうごとくに見えて、実は従順なるものである。子はさからいながらも、親を絶対に信頼して居る。そこにありがたい親子の道がある。

久遠の親は、我等各自のいのちのうちに生きて通う久遠のまことである。我等はただこの久遠のまことに生かされて居る。久遠のまことは人生の潤いである。すきみ行く心をあたため、沈み行く心をひき立てる深き命の力である。

唯一筋に事業にいのちを投げ込む人、唯純一の情をこの人生にささぐる人、唯我意の動くままに世をわたる人、人生のすがたはまことに様々である。しかしそれらのすがたのすべてを包容して、悠々たる久遠のまことが無かつたならば、それらの様々の生活そのものも成り立たない。さからうものも、久遠の親の心にささえられつつさからうのである。さからうことさえも、親のいのちの力の賜物である。

き現実のいのちである。我等の過ぎし人生の行路は、二十年、三十年の過去となれば、誠に人生一夢の感じを感じしめるものであるが、しかしながら、振りかえる過去の夢は、実は現実に生きて我等をはぐくむまことの背景である。過去をおもつて現在を淋しがる心は、不徹底の心である。現前の一日々々に、久遠のまことは我れを生かして行くのである。

人生四十といえ、直に惑と不惑とおもひ、人生五十といえ、我れもまた天命を知るかとおもふ。さりながら惑と不惑とを一貫して、天命を知ると知らざるを論ぜず、久遠のまことは、常に我等のいのちにかよい、惑不惑、知命の空華に迷わさるる我等のいのちを、底の底から潤わさずんばやまじと、常住にはたらく。我等をそこに生きさせて行く。

借問す、何人かこの世に久遠のまことに触れずして生き得る人があるか。さからうもの、ひがむ者、世のねじけ人、世のしれ人、白眼にして世をさげすむ人、これらの人もことごとく、久遠のまことの胸に包容せられて行く。牢獄に投ぜられて、明日は刑場の露と消ゆべき人も、なおこの久遠のまことの胸に生かされて行く。死生を一貫して、我等をはぐくむいのちこそは、我等が永劫(えうごう)の帰依処である。



我等は人生の経験を積み、年齢を重ねるにつれて、我等が宿業の世界が、同時に宿縁の世界であり、久遠のまことに貫ぬきとおさるる世界であることに徹するところ、順逆明暗、ただ一筋の光の下にある。人生の獄囚は転じて、久遠の親の一人子たるを知る。極愛一子地の自覚というも、そこを離れたるものではないと思う。

(昭和十一、六、二七日)

### 久遠の親心

まだ幼少の頃、私の心には一種の迷信のような感情がこびりついていて、それは途中で他家の葬式に出あったとき左右の親指をしつかり握って慎んで通らないと、自分の親を失うようになるという迷信であった。これは或る人が何かの機会に私に言ってくれたことであつたが、妙に私の感情生活にしみこんでしまつて、その後は途中で他家の葬式に出あう度ごとにしつかり左右の親指を握って慎んで通つた。そして自分がはや母と死別するようなことになつたらどんなに淋しいことであらうと考えた。

それは遠い少年時代のことである。今の私はその時代を追憶して、あの頃の自分は幸福であつたとしみじみ思うのである。郷里の熊本で両親の膝下で生い立った私は、その無限の慈愛に導かれた。中等教員の生活をして家族は多く始終家計が不如意であつた父は、その不如意な家計の中か

ら私のために常に学校の教科書以外の有益な書籍を求めてくれた。私はこれらの書籍を今でも大切に保存している。夏は江津川の流に棹して私や弟等を魚釣りにつれて行つてくれた。時には家族皆んなで行つたこともある。父が蚊頭針で幾十匹かの鮠(はえ)を小舟の上へ釣りあげる夕暮、十五夜の月が東の山から川の面を照らすとき、母が即座の歌を詠んだことなどもあつた。秋の夜は私や弟等は父につられて五高のまわりの石垣に鈴虫を祖母から教えらるるままに土鉢の中に入れて大事に養つたことなども遠い少年の日のなつかしい思い出である。

おもえばすべては過去となつた。今の私は父母と死別して既に十余年を過した。どんなにしつかり左右の親指を握りしめて居ても、時が来れば親は此の世を去つて行く。それは人の世の定めである。私の力をもつてこれを如何ともすることは出来ない。此の世に残つた此の身は今はいかに生きるようになってゐる。思い出は父母の無限の慈愛を語る。まことに今の生命の全存在こそは父母の慈愛の結晶である。

併しながら静かに私の過去をふりかえれば美しい思い出はむしろ少く、我が身の親不孝の思い出は多い。幼少の頃から蒲柳の質であつた私は、しばしば重い病氣にかかつて親に心配をかけたことは一度や二度ではなかつた。中学以

後は学問上の覇気で随分無理をしても学校は欠席しないようにしたので、その氣で身体を支配していたようなものでかねて病氣にかかる度数は少くなつた。併し時として重い病氣にかかつて、かようにして私は身体の上だけでも親に心配をかけ通してあつた。私が大学を卒業した頃母が私に言つたことがある。「将来もし外国に留学するようなことがあれば結構であるが、併し健康の点が心配である」と。

青年以後の私は精神的にも親に心配をかけ通してあつた。結婚の問題などで親に心配をかけた時、親は血の涙であつた。あとで母は私に言つた。「あの時は政雄を全く棄ててしまわねばならぬかと思つた」と。まことに子を勘当する決心をしてまでも子の生命を誠の道に導こうとした、その肉親の生命の動きに、今の私は久遠の親心を感じる。

久遠劫来の宿業の暗きをたどる此の私の心の闇に無限の慈愛の大生命を廻向して私と共に迷いの闇に苦しみ、その生涯を私のために苦しみ通して私の生命を光に導かずにはやまなかつた肉身の生命は、今の私にとっては生きて此の身にひびく生きた慈愛の生命そのものであり、久遠劫来の私の生命の迷いを悲しみいたわる久遠の御親の親心である。

此の頃の私には御聖教の文句が生きた教として身にしみるようになった。「三千大千世界に芥子ばかりも釈尊の生命を捨てたまわぬところはない」というようなことが、以

前には大げさにかかれた比喩のようにおもわれて居たけれども、今は我が身のことと感ぜられる。父母が自己を忘れて此の私のために身心をなげすめてくれたことをおもえば「不可思議兆載永劫において菩薩の無量の徳行を積植したまう。欲覚、瞋覚、害覚を生ぜず、欲想、瞋想、害想を起さず、色、声、香、味、触、法に着せず、忍力成就して衆苦を計らず、少欲、知足にして染患痴なし。三昧常寂にして知慧無碍なり。虚偽謡曲の心なく、和顔愛語にして意に先んじて承問したまう」という如来の大作は、やがて私の肉親の上にも顕現せられてゐることを痛切に感ずる。否今の私はこの如来の大作を私一人を指しての大作として、私の両親の生命の上に親しく直接に感ずるのである。まことに不可思議兆載永劫の修行は、この煩惱無尽なる私の生命の上に直接に廻向せらるる久遠の如来の大作であり、しかも私はそれをわが肉親の父母の生命の上に最も痛切に感ずるのである。



## 一道会の記

榊原徳草

次ぎに川畑愛義先生のお話は左記のようでありました。

今日ここへ参りましたら徳草師の奥様が、今日は道を迷わずに真直ぐに来られましたか、と。(註―毎年道がわからずに迷われる先生。案内状のハガキに道順の図をつけたのも先生のためが目的の大半でした)「イヤ今日はタクシーで来ました」と、まあそういうことで……。

池山先生という方は、どなたが話しても感銘されるのです。特にお歌の中の「久遠このかた子故の廻向、わたし一人をかたおもい」を或所で紹介したら、感銘をうけたらしくて、書きとめたいから黒板に書いてくれと言うのでした。私も年に一回ここへお伺いするのは、牛にひかれて善光寺参りじゃないけれども、池山先生に引かれてここにお参りするように思うのです。平生は念仏も何も忘れてしまつて、丁度浄住寺への道を忘れてしまつと同じことで、ここへお伺いすると何となく妙な氣持になる、有難いと思います。

徳草さん有難う(笑声起る)

この和尚さんが居られなんだから来ないんですね。ここへ来ると池山先生のお膝元というか、親鸞聖人のお近くへ参るといふ、阿弥陀仏のお膝元へまいるという氣がするので、これは私、本当に幸せということでありました。

私は仏様の話はできませんので、世間の話をしますが、この夏私はオーストラリアへ行きました。そこで何を一番感じたかと聞かれるんですが、私はまあ南十字星だなあと云います。あちらにはコブラとかカンガルーとかいるんですが、これはお土産に日本へ持ってこられるが、南十字星だけは持って来られません。その南十字星にある種の感動をうけますね、これは四つ星があるんです。その中のアルファ星というのは四百光年、一秒間に三十万キロ、一年間に九兆五千億キロ、それだけかかって四百年かかる。だから私の今眼に入る光は四百年前に出た光なんですね。宇宙の幽玄というか広さというか、それをしみじみ感じました。

徳川家康が幕府を開いたのは千六百三年だから、それより十七年前の光なんです。その時思つたのは私の今眼に入つた光は誰れの眼にも入らない、「親鸞一人がためなりけり」といふ。聖人の眼に入つた光、それは誰れの眼にも入つておらない。遠い南極の近くまでいつたおかげで、そういう遠い遠い御縁ということを感じました。

もう一つ感じたのは、オーストラリアに最初に行ったのはオランダ、スペイン、それからポルトガル人なんです。それらの人は何しに行つたかといふと、物が無いが、銀がないかと宝探しにいつたんです。所が英国人のキヤプテンシエームス・クックと云う人は眼のつけ所が違ふんです。シドニーの海岸に上陸して、ここはイギリスの国造りするにやからう、と思つた。それでそこにユニオンジャックの旗を立てました。そして本国政府に要請して国土とした。

これでこの人がオーストラリアの建国の父となつたのです、これは国造りを考えたんです。私はその時考えたことは、私共も本当に国造りが出来ないかと、出来ないことはない、お浄土という国造りができる、胸の中にお浄土を発見することができ、束縛のない涅槃の境を造ることができる。

アリストテレスという人は、人間の脳を三つに分ける、一つは叡智、二つは動物本能、三つ目は植物能。植物能は消化吸収など、所謂、植物人間。イギリスのチェッサーとい

う人は、人間は四階建てに住んでいるという。一番下には

動物的なもの、第二は情緒の世界、第三は智慧、第四は何だと思ひますか、これは霊の世界、スピリットの世界、人間が生れてきたからには霊の世界を見出す、謂はば浄土の世界、これを見出さなければ人間に生れた所詰が無いと。まあこれでオーストラリアの土産話は終りにします。

今日は私の池山先生観ではなくて、長田智龍という詩人がいます。その人の詩(うた)がありますので読んで教えるを受けたいと思うのです。それは池山先生がお亡くなりになつて間もなく書かれたものです。

溺れるものには慈父の如く、

怒れる者には悲母の如く

おこれる者には刺す如く

頭の下る心地して仰ぎ見れば

やさしきまなざしに、打ちうなづきて

口もとはほのかにほえみたまふ

よく先生の雰囲氣を詠つていると思います。もう一つ先生を詠った詩があります。これは先生が臨終近い時に仰言つたお言葉、

私のものとして何もない

残るものは何もない

ただ念仏だけ、念仏だけだよと、



世界が無くなることがあつても  
このまことは断じて無くならぬと  
身をもつて示された先生がよい証（あか）し  
この地球が亡びても

お念仏の世界は、滅びない  
素晴らしい先生からうけたインスピレーションだと思います。  
最後に短歌にして

大いなる師の相格をしのぶかな  
世の中が荒れていればいる程、先生のお言葉がひかり輝くと。

世の荒波にもまれてひかる

私は、花田先生、西元先生、いらつしやいますが、金子大栄先生は九十年の命を完全燃焼されたと云われます。池山先生は何という言葉で締めくくつたらと思いますが、やはり絶対他力ということじゃないかと思ひます。私達は他力他力と言ひながら、それは相対他力で引っかかっている、しかし先きのお歌にもありますように

たのませて たのまれたう弥陀なれば  
仏様に絶対にあたのむ、先生のお歌  
久遠このかた子故の廻向 わたし一人を片思い

たのむころもわれと起さじ

久遠このかた子故の廻向

わたし一人を片思い

る。マア帰れば何もなくなくなるんですが……。

超世の悲願ききしより 我等は生死の凡夫かは  
有漏の穢身は変らねど 心は浄土にすみあそぶ  
皆さん、我々は本当に人間に生まれさせていただいたが  
我胸三寸の中にお浄土を見出すには、その唯一の手段は、  
「ただ念仏しかない」ということを、池山先生から私は承つ  
たと思います、南無阿弥陀仏、タタタタ。失礼しました。

次ぎに山田幸先生のお話は次の様でありました。

私、岡山に住んでおります山田でございます。岡山は先  
程花田先生が話されましたように、池山先生が念仏の縁を  
結んで下さったゆかりの深い地でした。私は直接池山先生  
にお目にかかれませんでした、現在岡山で働かせていた  
だき御縁の深さを感じて居ります。

田舎の大学でございますので、先生と云われておったり  
すると重荷と変わってきますが、又一面に、名利に人師をこ  
のむという気持ちにもなります。その反面、仏の呼び声が深  
く私に呼びかけて下さるのです。

私共はいつもよくなりたいたいと思ひますが、よく生きた所  
で、そこにひつかかっています。どこまでも駄目なその自

ほんとに、お慈悲にドボツとつかっている、こう思つわ  
けであります。

絶対他力とは何であるかという、私、分析屋ですから、  
一つには純粹ということば、第二にすぎとほつておる、第  
三に寂靜という静けさ。あの微笑の中には、萬寂のしずけ  
さ、これが池山先生の中にある。それを更に引きくるめて  
云うと、言うまでもなく「ただ念仏」ということでありま  
す。それは何処から出てくるかというとお慈悲から出てく  
る。

先生もお慈悲には随分お悩みになつたんですね。先生の  
告白をお聞きすると、歎異抄第二章の中で「親鸞におきて  
は」とあるのを「池山におきては」と置きかえて、大信  
海に、光明に照らされている自分を発見される。「池山に  
おきては、ただ念仏して弥陀にたすけまいらすべしと、  
よき人、親鸞聖人の仰せを蒙りて信ずる外に別の子細なき  
なり」「念仏はまことに浄土に生るるたねにてやはんべる  
らん、また地獄に落つべき業にてやはんべるらん、総じて  
もて存知せざるなり」ここには純粹、そして寂靜、こうい  
う先生というものが、西元先生の仰言るように、四十三年  
経過した今に、益々先生を慕つて、こうしてお参りする人  
が多いという、これは全く奇跡だと思う。他の言葉で云え  
ば、仏の加威力である。私のような男でも引きつけて下さ

分をお見抜き下さつてお呼びかけて下さるのであります。

どこどこまでも駄目なそこをかねてしろしめされた世界  
が念仏であると、そんなことを感じております。すこし研  
究などがうまくゆきますと、真理の発見ということを懸命  
にやっておりますと、そこに出てくるものは、やはり名利  
であつたと省みさせてられるのであります。これで失礼さ  
せていただきます。

# 『華嚴經』序歌

仏の身は 清くして寂なり

御光はなべて世を照らせども

まことに寂にして すがたなし

仏の境界は測り難し

限りなき御教も

一つの聲にのべたまう

此のみ声あまねく至り

人々は器に随いてさとり

おのおの御教は一つと思えり



## 凡骨日誌抄 (2)

——大悲無倦と雪がふる——

西 元 宗 助

正月早々、すこし風邪をひきましたため、それに賀状書きのこともあって、二月号の原稿はついに間にあいませんでした。ごめんください。

○ 正月の十日は、ご本山ご正忌報恩講にお参りさせていただく。ぞくぞくと参られる沢山の善男善女の方々と共に、ご影堂の大量敷に坐して、まず合掌礼拝する。わたしは、この大量敷が好きで、ここに坐すると、ほんとうに心やすらぐ。

午前十時になると、ご内陣の正面の傍に、紫の衣を召した前門さまのお姿が拝せられる。ご門主とは一日交替と承っているから、今朝は前門さんのご当番なのであろう。やがて緋の衣の導師の方が正面に着席なさって、おごそかに、そしてにぎにぎしく御法要がはじまる。

ことしの冬の寒さは格別で、殊に火の気のない広いご本

その翌日は、大谷大学に近い下総町の安田理深師宅に伺う。おん年八十才をすぎられたか。かえりみると学生時代からの不思議なご縁である。

わたしは学生時代、羽溪了諦先生の知四明寮解散後、川畑愛義（京大名誉教授、当時医学部学生）、宮地廊慧（加州、サントバーバラ在、当時龍大学生）、それに長谷顕性（富山県住職、当時龍大学生）の三兄らと共に、鹿ヶ谷に一軒の家を借りて住み、そこを学道舎と名付けた。なおその命名者は、当時龍谷大学の宗教学教授であられた禅の久松真一先生（昨年一月遷化）とところでその学道舎の傍、疎水のほとりに、興法学園があつて、そこには大谷大学を退かれた曾我量深、金子大栄の両先生を慕う谷大学院・研究科の安田理深、松原祐善等の俊秀四、五名がおられた。みんなは真摯な方ばかりで、お互いに親しく出入りさせていたのだ。曾我・金子両先生のご講義を承りえたのも、このご縁であつた。

このような昔からの深いご縁で、この日もいろいろとご法談をうかがう。なお、旧年亡くなられた信国淳師（当時、大谷専修学院長、フランス文学者）の左の書が、師の客間に掲げられてあるのも感銘深かった。それは

われら一向に念仏申して  
仏天の下、「青草」びととなりて

堂の寒気は、身に沁みましたが、しかしそれだけに、聖人のありがたさも身に沁みるようであつた。わたしの後に神妙に座つて、「入出二門偈」も御一緒に誦した若い女の方は、本山の中央幼稚園の先生がたのこと、さすがはと、ひそかに感じいったことでありました。

○ ご法要が終ると私、前以つてご案内いただいていた白書院（国宝）の「一の間」に赴く。桐溪順忍・瓜生津隆雄・吉田充之等の勸学さんたちや男女の特別招待者の方々が参つてこられる。わたしは瓜生津和上の隣りに、晴がましいながら、和上に勧められるままに座らせていただきました。そして恒例通り、総務さんのご挨拶があつて、それから本願寺出入りの法衣店や仏具店等のご主人たちが、紋付袴に威儀を正して、お斎とお抹茶のご接待をしてくださる、勿体なくて恐縮することしきりでありました。

祖聖に続かむ

辞去しようとする、安田師曰く、人間に最後まで残るのは、愛欲と名利。だから聖人も、「愛欲の広海に沈没し、名利の大山に迷惑し」と。殊に齡をとるほど激しくなるのが名利の念。しかし、われら他力に帰して「名声十方に超えむ」という法蔵の願に乗托するものは、自分の名利のごときは自らにして越えさせていただけなのではありませんかと。なにか、じーんとこたえるものがありました。

○ 正月早々、わがノートに、聞不具足、信不具足。ついでに学不具足、坐不具足とする。そして十分に具足してあるのは煩惱だけか、いや、お慈悲さまかと、あらたまつて感じ入ることでありました。

それだけに近角常観師のあるときのご文章に、「かくの如き本願を聞きながら、なおわが悪を悲しみ、わが善を励まんとするところのみは、修養としては感すべきことなれど、その実、自己の身の上を知らざるものなり。もし極言せば、わが悪を悲しむは、われ悪を去り得べしとの下心あるがためなり。善を励まんとするところは、われ善をなし得べしと、かしこき思いのひそめる故にあらずや。かくて、わが悪を悲しむは、すこぶる恭謙なるが如きも、如来に對



しては全く頭をさげざるなり。わが善を励まんとするは殊勝の態度なるが如きも、本願に対しては却えて驕慢なる態度をとれるなり」と。(「慈光」誌三二巻五号)なるほど、なるほど、ありがたく、くりかえし、いたたく。

○

そう申せば、アメリカ加州ローダイ仏教会の開教使、福間誠幹師は、「大乘」一月号に、木村無相さんの「雪の詩」を引用なさって、「人間に生れてよかったな、煩惱具足でよかったな」と、喜んでいられる。その詩は、

雪がふるふる 雪がふる

雪みてあれば 雪がふる

煩惱無尽と雪がふる

大慈無倦と雪がふる

雪みてあれば 雪がふる

ナモアミダブツ

ナモアミダブツ

なお福間誠幹師は、近著のアメリカ仏教会の機関誌『ほうりん』Wheel of Dharma にも、「死ということ」という感銘深い文を載せられている。

右のように、毎月、仏教関係の雑誌や新聞だけでも十五、

## 御一代記聞書抄 (続・一七)

南殿山水の御縁の牀の上にて、蓮如上人仰せられ候。

「物は思ひたるより大いに違ふといふは、極楽にまいりての事なるべし。ここにてありがたやたふと思ふは物の数にてもなきなり、彼の土へ生じての歓喜は言の葉もあるべからず」と仰せられしと。

(第二四七条)

此の条を拝読すると仏教の奥深さが改めて偲ばれます。仏教は宇宙天地の真理にもとづくものであり、その究極の真理を真如といわれている事はどなたも承知のところですが、しかしその真如を人間の觀念に拘替えるところに思考の錯誤があります。真如は例えば大乘起信論では「言説の相を離れ、名字の相を離れ、心縁の相を離る」と示されています。つまり言葉も心も及ばれぬ真理自体の世界であります。これを妄想分別して生滅差別の相として現じているのが人

六いたたく。勿体なくはあるが、全部目を通すだけの余裕がない。申訳ないとは思いますが、ざっと目を通して、合掌して処理する。その中、時折、珠玉の文字に出会う。福間師のものも有難かったが、そのほかでも、たとえば

「大古よりの遺産、それは我が身である」(藤代聡磨氏)と。

それから、前記の『ほうりん』に、今村亮青年開教使(パークレーの松浦忍女史の孫であり、かつ今村寛猛元ハワイ開教総長の令息)が英文で「三世開教使」と題して、「本願寺は、わが家である」「本願寺は、わが血―身体の中にある」と述べているのを読んで、わたしは少し、目頭があつくなりました。

この機会を利用し、はるか海外の開教使の諸先生に、そして購読者の方々に、深甚なる敬意と謝意を表し奉る。

(一月二十一日)



## 井上善右エ門

間の現実相です。

その現実相は、真如に背を向けた分別沙汰の世界であり、それに執着しているのが我々ですから、そこに果しない矛盾が生起して苦悩せざるをえません。「生は苦なり」といわれる所以がここにあります。その因はまさしく無明にもとづく妄業と煩惱の集合によるのですから、ここに苦諦(果・集諦(因)の因果が連綿として継続するのです。この迷の因果を真如は内に包んで一時も離れることなく、やるせない慈悲となつて顕現し、これを撰取して真実の世界に導きたまうのであります。その真如の活動態が真如自体表裏して、働いて下さるところに阿弥陀仏の本願がましますのです。ここに我々にとつて覺の因果たる滅諦(果)・道諦(因)が仏の方より成就されている所以があります。

心も言葉も及ばれぬ世界から、名を示し姿を顕わして迷



える我々に働き及んで下さるとは、何というおふけなき事でありましょう。大悲の国たる浄土の真実相を三種二十九種の莊嚴として我々に領けるように展開して下さって、その浄土に迎えたまうのです。

## 二

浄土の莊嚴相をよく拝読してみると、我々の現実世界とは全く異なることを窺い知るのです。天親菩薩の浄土論には浄土の総相を「究竟して虚空のごとく、廣大にして辺際なし」と述べられており、曇鸞大師の讃阿弥陀仏偈には浄土の聖衆を「顔容端正にして比すべきなく、精微の妙軀にして人天に非ず、虚無の身にして無極の体なり」と説かれています。かかる浄土の相状を人間の感覚的な世界と取違えて、人間の欲望の対象にするということは、とんでもない間違いであります。第一二二条に「極樂はたのしむと聞き参らんと願ひ望む人は仏にならず、弥陀たのむ人は仏になる」と誠められているのはもつともな事です。苦集諦より滅道諦への転迷開悟を思わずして、極樂を仰ぐことはできません。

さて本条に「南殿の山水」というのは、山科連署記によると、延徳元年（一四八九年）八月上人七十五才のとき御隠居になり、山科の南殿に移られ実如上人が相続なされた

けて「言の葉もあるべからず」と示しておられます。

しかしそう言えば、我々は浄土と全く隔絶されてしまっているという思いになるならば、浄土の真実はこの娑婆を超えながらこの娑婆世界を包んでおられます。従ってこの娑婆にも浄土の光は射し込んで下さるのです。その光に浴することこそ信心に外なりません。その信心に与えられる自然の徳から浄土を偲ばせていただく事が出来るのです。浄土の真実を味う場所は実にこの娑婆なのであります。彼の土の歡喜を偲ばれたればこそ「彼の土に生じての歡喜」という言葉が出たものと拝します。

空善記には、連如上人が、無始よりこのかた三界に流転してきたけれど「このたび浄土へまいるは始めたる所なり、三有のめぐり果てたるなり」と申され、その仰せを聞いてみなみな落涙したと記されていますが、その時の情景が彷彿とするようにあります。

とありますから、その南殿においての事であります。縁とは座敷を取まわす縁であり、縁とも書きます。その縁に坐られて庭の山水をご覧になっていたとき、ふと今の言葉が湧き出たのです。それはおそらく面白く造られた山水を眺めるにつけても、浄土の至妙なる莊嚴を偲ばれた感嘆のお言葉でありましょう。それを「物は思いたるより大いに違ふといふは極樂へ参りての事なるべし、ここにてありがたやたふと思ふは物の数にもなきなり」と嘆じられたのです。

浄土の妙なる事は、到底五官の感覚に閉じ込められている我々の想像もつかぬところであります。第三七条に「極樂の生無生の生といふなり」と申されてあるごとく、流転輪廻を離れて悠久の真実と一味となる、それは何というすばらしい事でありましょう。

## 三

つづいて「彼の土へ生じての歡喜」とあるのはどういう意味でありましょう。浄土はこの世の意識を超えた世界でありますから、この世の歡喜とは次元を異にするのではありませんか。我々は歡喜と聞けば、すぐその歡喜に捉われて、その歡喜を目的として往生を考えるようになりますが、それは觀念の遊戲に墮するというものです。それを斥

### 清水凡禿居士 排句抄

道徳はいくつになるぞ明の春

親二人いましてここに雑煮かな

お念仏につつしんで迎ふ初日の出

どこまでも限なき春の光かな

またここに仰ぐや春の日の恵み

はづかしや春日に目立つごみほこり

大船に身をまかせて長閑かな

はからいも舟の中なり春の海

父に似し羅漢ありけり緑り寺

念仏の声もろともに田植かな



# 念仏詩抄

木村無相

如来ひとえに

香師おおせに

後生

願わぬは

罪を

知らざるなり——

香師——香樹院徳龍師

罪 罪 罪

久遠劫来の

おそろしき罪

山ほどの罪

地獄必定の罪——

如来ひとえに

われを案じたまう

香師おおせに

“お助けであろつと

思うぐらいは

不足なり——”

あろつにあらず

お助け下さるなり

かならずぐ

お助け下さるなり

お誓いは

若生者不取正覚の

おん誓い——

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

まことの御恩

香師おおせに

“これで参らると

わが心を力にしていたが

信得てみれば

まことの御恩が知れる”

まことの御恩は

如来さま

わが心は

ミジンもアテにもカイにも

ならぬなり

“ただ念仏のみぞ

まことにておわします”

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

後生というは

香師おおせに

“わが身ほど

大事なるはなし

わが身について

後生ほど大事なるは

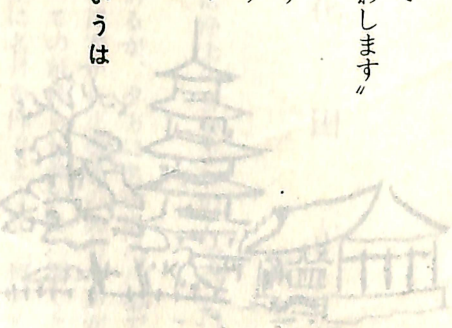
なし——”

後生というは

今の後生

いつももしれぬ

後生ではない





今 今 今  
たった今死んでも  
生き甲斐あったか――

ナムアミダブツ  
ナムアミダブツ  
ナムアミダブツ  
ナムアミダブツ

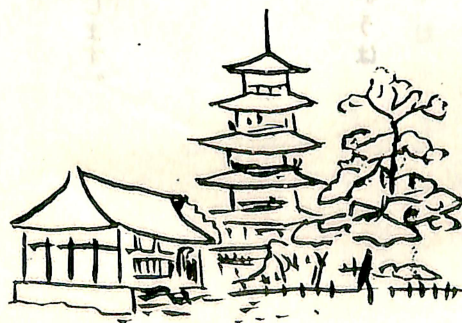
### 御化導（ごけどう）

香師おおせに  
願いにくいは後生  
はれにくいウタガイなり  
願にくい者に願わせ  
ウタガイはれにくい者に  
はれさせ給うが御化導なり”

御化導 御化導  
ナムアミダブツは  
御化導のキワマリ  
如来さまは

ヨル・ヒルなしに  
ナムアミダブツ  
ナムアミダブツと  
日夜（にちや）に  
御化導

ナムアミダブツ  
ナムアミダブツ  
ナムアミダブツ  
ナムアミダブツ



## 法味断片

### 浄土の音楽

私はひどい音痴で、音楽について何もわからないのであるが、京都の学生時代に、京阪間の小さな富田駅の歳末、十人ばかりの人々に雑って、列車を待つて小さなストープで暖をとっていた。そこへ尺八を奏しながら門付けしていた人がやって来た。見れば身体が不自由で、みすばらしい姿であったが、ひとり駅の片隅に皆んなと離れて腰をおろしていた。しばらくすると、持っていた包みから尺八を取り出して、丁寧にそれを押しいたいて、静かに吹奏しはじめると、歳末の忙しさでとげとげしい顔をしていた人達の顔が段々と和らぎ、じつと耳をかたむけていた。私は思わず、うろ覚えの浄土和讃、

清風宝樹をふくときは ひとつの音聲いだしつづ  
宮商和して自然なり 清浄勲を礼すべし  
三途苦難ながくとじ 但有自然 快樂音  
このゆえ安樂となずけたり 無極尊を帰命せよ

## 花田正夫

を誦し、ひそかに浄土の音楽をしのんでいた。

終戦前のことであるが、夕方に名古屋の八事で電車を待っていた時、近所の民家から正信偈の勤行の音が聞えてきた。何でも一家揃っての誦経らしかった。聞くともなしに聞いていた時、秋空に名月を仰ぐような、何とも云えぬすがすがしいものを覚え、おもわず私の口からお念仏がしきりにもれた。忘れ得ない思い出である。

数年前の放送で、音楽家の黛（まゆずみ）さんの話があった。氏ははじめ音楽の修業にフランスに留学していた時、一生懸命に西洋音楽を学んでも、結局はあちらの模倣である。自分は東洋人であるから東洋の音楽があるに違いないと気付いて、早々に帰国した。或時、京都の知恩院で沢山の僧侶が集って読経するの聞き、非常に驚いた。というのも、人々持ち前の高低・強弱・清濁の音声が、そのままに調和された、



不思議な誦經の唱和にふれ、不調和の調和の微妙さにふれたからであった。

又、歳末の除夜に、名利から聞こえてくる梵鐘の微妙さ、そこには作者の全生命が注ぎこまれて韻々と地をゆるがせて響きわたっているのに、深い感動をうけ、そうしたことによって東洋独特の音楽を聞きとった由である。

○ 福島政雄先生は、東洋の音楽は、心を自然に和らげ、静めるが、西洋の音楽は、心をかきたてる趣きがある。この両者を調和されたものに、ベートベンの第五シンホニーの第三曲がある、と言われたことがある。

先生はさらに、晩年の親鸞聖人について、聖人の御晩年ことに御和讃をつくられた頃には、いつもお心の中に浄土の音楽を聞いていられたと思う、と云われた。

○ 以上、思い出されるままに誌したのも、一昨年秋の京都の一道会の時、ロンドン大学で仏教学の教授をしていられる稲垣久雄氏が次の様な感話をして下さった。

数年前、大谷光照師をロンドンに迎えたのがきっかけとなって浄土真宗会が結ばれた。そこに集る人々が読経を習いたいとの申出で、会ごとに正信偈や歎仏偈などを唱和している。その人達は、道理や理屈は本を読めばわかるが、

が淋しい。人間は何時どんなことが起きるかも知れぬ。そうなればこの世の成功も空しくなるから」と念仏申していた。これを傍で聞いていた孫がそのまま書いて東京の親に知らせた。

このことが弁護士さんの心を動かして、大切に聞法し、やがて念仏の手紙を出すようになった。これを読んで親は「こんな嬉しいことはない、これで本当に安心した」と非常によろこんだ。

そうしたことから弁護士さんは「今日まで親を喜ばそうと思つて種々なことをして来たが、親の本当のよろこびは、わが子が真実のしあわせになるのを知ることであった。今日まで、親を心からよろこばす道も知らなかった」と、人々に懺悔話をするようになった。

○ 親はいつも子の身になる、そこに子のよろこびが親のよろこび、子の悲しみが親の悲しみである。子が聞法によつてゆるぎのない生のよるべと、死の帰するところを獲る時こそ、親は心からよろこび、安心してくれるのである。

○ 福島政雄先生が、広島高師に勤められていた頃、お嬢さんが学校で「親に感謝せよ」と教えられて、お母さんありがとう、お父さんありがとう、と事毎に言うようになられた。それが親には他人行儀らしく聞えて、とうとう「あん

原文のままで誦經していると、そこに何とも云えぬ雰囲気、微妙な味がある。ことにその中の一人は、一声々々、お念仏を味いながら唱えていると語った由である。

○ そこに、私は、原文のままの誦經の中に不思議な德音を知らされ、浄土の音楽の味のあることを知らされた。天親菩薩の願生偈に、

梵声の悟らしむること深遠なり

微妙にして、十方にきこゆ

とは、そうした妙味を仰言るのであろう。

○ 真宗の信者の人々が、朝夕に仏前に坐し、御札の読経をするのも、煩惱具足の身が、五濁惡世に処して、造り続ける罪障に、こわばり、汚れる身が、仏陀の実語の中に浄土の音楽がひびき、そこに日々に心あらたに仏恩を謝するのである。

### 親のよろこび

安芸門徒で有名な広島県出身の人で、東京に出て弁護士となつて立派に成功した。或夏、子供二人を父母の住む故郷広島に休みを利用して行かせた。そこで種々な土産物を容れた大きな小包を父母のもとに送った。

これを受取った母が、包みをほどこきながら「息子も立派に成功しているのは嬉しいけれど、仏法を聞いてくれぬの

たがよろこんでくれることがお父さんには一番嬉しいので、ありがとう／＼と云わなくていいよ」と云われたそうである。親と子が二にして一、一にして二の消息がそのままうかがえるのである。

### 人間に生れたよろこび

源信僧都の横川法語に「それ三惡道をはなれて人間に生れたること大きなよろこびなり」とあり、次に「本願にあうことをよろこぶべし」とある。

私共のよろこびは、ほとんどが着た衣服、(名譽とか財産とか権力)についてであつて、人間に生れた素裸のなりの喜びではない。こうした自分を省みるにつけても、僧都の人間に生れたことの喜びの尊さに心をうたれる。

而も、素裸のなりのよろこびだから、智者も愚者も、老少男女をえらばず、仏の本願のまことの光明にあう者のすべての人に自然に恵まれるのである。





## あとがき

暑い寒いも彼岸までと云い古して来ましたが、本年位彼岸を待たれた年はありませんでした。ことに大雪に悩まれる方々には格別でしょう。

本月の近角先生の他力信仰の妙趣は、本願の思召を聞かせていただくことの大切さを懇切にお述べ下さったものであります。法然上人が「順彼仏願故」の一句に随喜せられたことも思い併せました。

福島先生の随筆は、地上の父母をとおし、その奥に光背となつて下さる弥陀仏の久遠の親心を讃仰されたもので、御和讃の「子を母を思うが如くにて、衆生仏を憶すれば現前当来とおからず、如来を拝見うたがわず」のころの通りであります。

編原様の一道会の記録で、川畑愛義さんのオーストラリヤの土産話から、池山先生四十三回忌に追慕の情を述べて下さいました。ことに鯖江の長田智龍さんの詩を紹介されて、池山先生の徳風を讃えられました。遠ざかれは忘れ疎んじる世に、半世紀近くいよく池山先生を慕う集いの段々熾んになりますこと

は不思議であります。

西元様の日誌抄に、西本願寺の御正忌報恩講の様子を手にとる様に記して下さい、又信国淳師、安田理深師の事も述べて下さいました。なお正月早々自照の一端を誌されて、ふかい法味を頒って下さいました。

井上様は、浄土は苦楽を超えた不可思議と申すほかにない妙趣を詳しくお書き下さいました。蓮如上人は、百のものは十に、十のものは一に、分り易く手短かにお述べ下さるので、とかく上滑りし易いことも深く反省せられました。

木村さんは、白内障のため片眼、しかも残る眼も段々不自由とのこと、難儀な中を清書して詩稿を送って下さいました。「一期一会」のそのまゝのお気持であります、謹んで慈光にのせさせて貰っております。

慈光も本号で三十三巻の三となりました。諸先生はじめ誌友の皆様のお念力に支えられてきました。終戦直後、出版物も不自由で信仰書が少なく、又旅行も難儀な頃に、心の底にのこりました法語を小冊子にしておとけしたのが始めてでしたが、その後私が病身で旅行も不自由になるにつけ皆様との心の交流を小冊子に托するようになり、文字のあることを改めて謝しましたことでした。

## △御案内▽

○毎月第一、第三日曜、午後一時半

一道会例会。一道会館の南隣り、

南区駆上町二の八六。鬼頭康彦氏宅

市バス、新郊通り一丁目下車、東入ル三筋目、角。

地下鉄、新瑞橋終点下車。

○教西寺、法話会。昭和区小桜町二丁目四

毎月二十四日、午前・午後。

市バス、御器所通り又は北山下車。

地下鉄、御器所通り下車

○蓮光寺修道会。毎月七日午後一時半。

(但し日曜を除く)尾西市三条板倉

名鉄新一宮駅よりバス、西三条下車。

定 価 半 年 八〇〇円(送共)  
一 年 一六〇〇円(送共)

編集・発行人 名古屋市南区駆上町二ノ八八

印刷 花 田 正 夫

電話八二二局七〇三七番

愛知県西加茂郡三好町大字福谷

印刷 人 坂 部 光 雄

名古屋市南区駆上町二ノ八八

発行所 慈 光 社

振替口座 名古屋一〇四七〇番

郵便番号四 五 七